

II. 来待石のストーリー



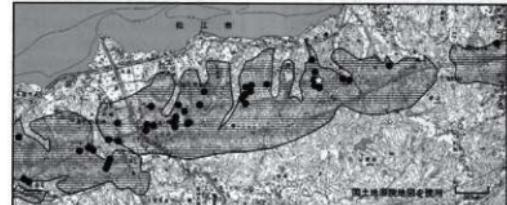
来待ストーンと石切場（モニュメント・ミュージアム 来待ストーン提供）

宍道町来待を中心には玉湯町湯町付近まで見られる来待石は、**凝灰質砂岩**といふ岩石で、比較的軟らかく、加工しやすい石です。その利用は古墳時代にさかのぼり、古代・中世から現代まで、用途や目的を変化させながら使われ続けてました。

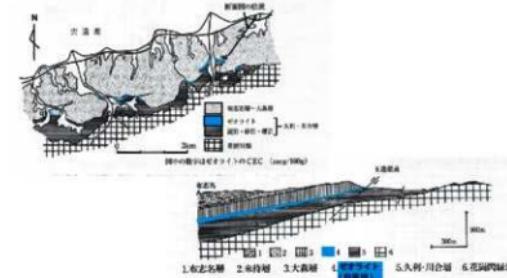
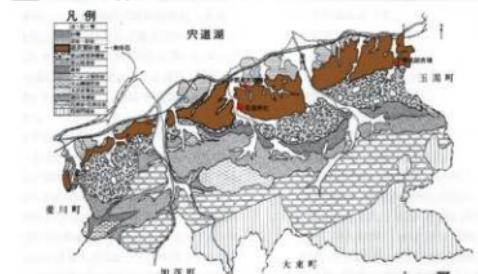
来待石は、宍道湖南岸に広がる大森層と呼ばれる安山岩溶岩の上に堆積しています。広域に露出しているので、石切場も数多く知られており、切り出しやすいことも盛んに使われた大きな要因と考えられます。近代の石切り場の様子や、石切、運搬などに使われた道具などは宍道町来待の、ストーンミュージアム来待ストーンで見ることができます。

また、来待石が分布する外縁を中心に、きめが細かく白っぽい漂石岩（ゼオライト）が産出し、通称「白来待」や「白粉石」と呼ばれています。来待石と同様に利用され、分布域もよく似ています。この「白来待」もあわせて、来待石のストーリーを語っていきたいと思います。

^{ゼオライト}



■ 来待石の分布 ★ 2017年現在稼働中の採石場 ● 休止中または廃止の採石場



来待石（上）と白来待（下）の分布（『松江市史』史料編「自然環境」より転載一部改変）

1. 古墳時代の石材

来待石の利用 古墳時代には、中期（5世紀）ころから古墳の埋葬施設の石棺として用いられ、後期（6世紀～7世紀前半）にはきれいに切り出された板石を組み合わせた横穴式石室に用いられました。主に宍道湖の周辺に来待石を利用して古墳が多く見られることから、舟を使って石材を運搬したことが想定されます。

中期（5世紀ころ）は来待石が採れる場所の対岸にあたる古曾志町の史跡丹花庵古墳で長持形石棺として用いられます。この蓋には文様が刻まれていることで著名です。5世紀後半以降、出雲地方に広く分布する舟形石棺でも多く用いられ、東は竹矢町の竹矢岩船古墳、西は出雲市斐川町の神庭岩船古墳にまで広がっています。後期（6世紀後半～7世紀前半）は横穴墓などの石棺に用いられるとともに、東部出雲特有の石棺式石室にしばしば用いられ、美しい石室を演出する石材となりました。宍道町の伊賀見1号墳、玉湯町の林8号墳がその代表です。

白来待（白粉石） 白来待は、玉湯町周辺で、5世紀以降に石棺として用いられました。国史跡の徳連場古墳、県史跡の玉造築山古墳をはじめ、6世紀代まで石棺に用い続けられています。また、6世紀後半以降、横穴墓の内部に置かれた組み合わせ石棺によく用いられていて、対岸の西浜佐陀町北小原1号横穴では、二つの石棺と、横穴墓の入り口を閉める大きな石に用いられています。

来待石と白来待 この二つの石材は、産地が近いこともあって、その分布する範囲は重なっています。分布図を見ると、おおむね来待石の流通範囲が広く、白来待はその範囲の中に収まって入れ子状になっているのが分かります。

少し詳しく見てみましょう。最古の来待石の利用は古曾志町の丹花庵古墳の石棺です。5世紀初めごろ、ヤマトの大王墓と同じ長持形石棺を来待石で制作しました。古曾志周辺は、松江市北部有数の大型古墳の集積地です。丹花庵古



宍道町伊賀見1号墳石室と閉塞石



白来待の剖面と風化面

墳はその中でも大きく、出雲で最大規模の方墳の一つだったと考えられます。石棺の蓋には直線と三角形を組み合わせた幾何学模様が刻まれており、新たな技術や情報を受け入れられた古墳です。出雲を代表する中期古墳に取り入れられた来待石の装飾石棺が語ることは、まだまだ明らかにされていないことが多いといえます。

5世紀終わりごろ、舟形石棺が出雲の豪族のトレンドとなります。来待石は、東部出雲のトップである竹矢岩船古墳と西部出雲のトップである神庭岩船山古墳で用いられています。このときに東西の分布が最も広くなり、25キロ以上になります。重要なことは、地域のトップを張る豪族の古墳に利用されていることでしょう。これらの古墳に後続して、白来待が史跡徳連場古墳、鳥場古墳など玉造温泉周辺の小古墳の舟形石棺に利用され始めます。おそらく白来待が切り出しやすい玉造周辺で多く



古曾志町丹花庵古墳石棺（来待石）



古墳に用いられた来待石、白来待（白粉石）の分布図



出雲市神庭岩船山古墳石棺（来待石）



竹矢岩船古墳石棺（来待石）

利用されたと考えられ、来待石を手に入れることのできない小地域の豪族の石材だったと推測されます。

古墳時代後期～終末期、6世紀後半以降も来待石が上のランクに位置づけられる傾向は変わりません。出雲地方東部の首長墓「石棺式石室」は、玉湯町林8号墳、宍道町伊賀見1号墳が来待石で作られ、7世紀以降の終末期になんでも宍道町の鏡北廻古墳、下の空古墳が来待石で作られています。一方、白来待は横穴墓の中に収められた石棺に用いられた例が多く見られます。注目されるのは、5世紀には来待石が石棺



玉湯町徳連場古墳石棺（白来待）

玉湯町林8号墳石室
(来待石)
(出雲玉作資料館提供)宍道町鏡北廻古墳石棺式石室内部
(来待石)
(タニグチダイスケ氏提供)

として用いられた、宍道湖対岸の古曾志地域でも横穴墓の一部として白来待が用いられていることです。西浜佐陀町北小原2号横穴墓では、墓室中の二つの石棺と室の前を閉じる閉

塞石に白来待が使われています。5世紀までは来待石を手に入れていた湖北の首長も、石室より一段ランクの低い横穴墓には白来待の石棺が入れされました。

古墳時代の来待石、白来待はローカルな石材ではありますが、時代による利用度の変化や分布の違いから、小地域ごとの歴史的関係を推測できる重要な資料になるのです。



玉湯町花立横穴墓の白来待石棺材



白来待石棺材の新鮮な面

2. 奈良時代の来待石

古墳が作られなくなると来待石の需要は減っていきますが、利用されなくなるわけではありません。奈良時代は仏教で日本を護る、という考え方を根底にして国家の政治が進められました。奈良の平城京には東大寺や興福寺など、巨大な寺院が造られたように、地方にも有力な豪族が氏寺を造りました。松江にも『出雲国風土記』に「新造院」と記載された寺が8世紀には建てられています。そのうちの一つ、史跡山代郷北新造院跡（來美磨寺）には、多くの来待石が利用されていました。

山代郷北新造院の金堂と須弥壇 復元図を見てみると、北新造院の建物がどのようなものだったかわかります。山のふもとの一段高いところに金堂が置かれ、その両脇に三重塔が建てられたことが明らかになっています。金堂の階段が残っており、来待石が使われています。金堂跡の中央には、3体の仏像（ご本尊）を安置する須弥壇が残っていて、その外装部材にも来待石が用いられています。山代郷北新造院の塔のてっぺん 塔の屋根の上には、細長い構造物が載っており、「九輪」と呼ばれています。北新造院の東側の塔では、この九輪の部材の多くが来待石で作られていました。石の部材を重ねているので、とても重たかっ

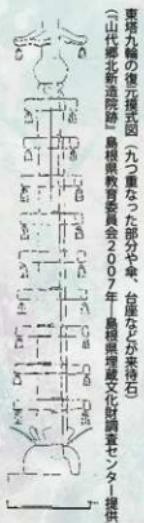
たものと考えられます。それでもあえて来待石を用いたところに、この石に対する価値観が高かった可能性をうかがうこともできるでしょう。全国の古代寺院跡を見渡しても、とても珍しい例です。



山代郷北新造院の復元図（中央が金堂、右が東塔）
(島根県立八雲立つ風土記の丘提供)

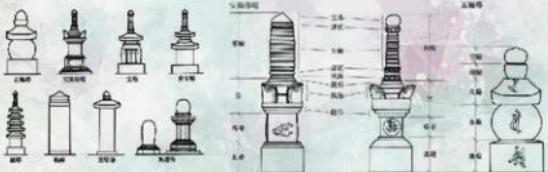


整備された山代郷北新造院跡須弥壇



山代郷北新造院出土の来待石
(九輪の一部)

3. 中世・近世の来待石



①主な石塔の種類

①②③いずれも穴道町ふるさと文庫19「白來待・来待石の宝篋印塔、五輪塔」より転載)

①石塔

中世になると、白来待が宝篋印塔や五輪塔など、石塔の材料として用いられました。石造宝篋印塔は中国から鎌倉時代初期に日本に伝わり、中期以後に盛んに立てられました。

中世の石塔 松江周辺では、いつごろから石塔が建てられたのでしょうか。古いタイプの石塔は、白来待が用いられる傾向があるようですが、正確に年代を知るには、石塔自体に造立された年代が刻まれている（紀年銘）ことが必要です。今知られている中で紀年銘がある最も古い石塔は、秋鹿町の寺の前古墓群に残されている白来待製五輪塔で、「永徳元年辛酉八月廿八日」と刻まれています。永徳元年は1381年ですから、南北朝時代の終わりごろには地元の石で石塔が作られたようです。全国的な動向を見れば、鎌倉時代にさかのばるものもあったと考えた方がよいでしょう。



②白来待の石塔分布図



大庭町正林寺五輪塔群（白来待）

松江に現存している白来待の五輪塔の代表が、大庭町の正林寺に4基残されています。五輪塔の元の特徴がよく残っており、13世紀後半から14世紀前半の鎌倉時代後期と推測されます。正林寺は、古代には大庭町周辺に拠点を置き、10世紀ころに西に遷って出雲大社宮司家となった出雲国造家の菩提寺と言われています。また、出雲國府中として中世にも栄えていた土地だけに、地域の有力者の墓塔の可能性があります。同様の時期と考えられているのが、浜乃木町善光寺にある佐々木高綱五輪塔です。白来待で作られています。これらに続く14世紀後半の代表として、宍道町西来待の伝大野次郎左衛門墓塔とされる五輪塔があります。室町時代前半としては珍しく来待石を用いており、高さ2.85mと巨大な石塔です。

宝蓋印塔の中でも古い特徴を持つものに、発掘調査出土品ですが、法吉町の二反田古墓の墓塔があります。15世紀代、室町時代ごろと考えられており、白来待製で高さ

は1mをこえます。宍道町岩屋寺薬師堂周辺にも室町時代前半と言われる白来待製の宝蓋印塔があります。中世前半期には日引石（福井県高浜町日引で産出する凝灰岩）など、他国から運ばれた石材も使われていますが、地元の石としては白来待が一般的だったようです。その中で、

松江最大の伝大野次郎左衛門五輪塔のようにまれに来待石を用いたものもあり、注目されます。

戦国時代の終わりごろ、16世紀後半には来待石を使った石塔が現れるようです。紀年銘が刻まれた

ものでは、宍道町東来待岩屋寺にある宝蓋印塔が



主要な来待石の石塔分布図（宍道町ふるさと文庫19「白来待・来待石の宝蓋印塔・五輪塔」より転載）



宍道町伝大野次郎左衛門五輪塔（来待石）

最古で、「文禄（五）年二月」（1596年）と彫られています。これが墓塔であれば、戦国時代末の最古の紀年のあるものになります。ただ、確実に戦国時代にさかのぼる来待石の石塔はよく分からぬのが実情で、大量に生産されて建てられるのは次の時代を待つことになります。

江戸時代の石塔 関ヶ原合戦後、出雲国へ入封した堀尾氏は一族の墓や供養塔に来待石を用いました。出雲地方の石塔の石材を調査した結果、来待石が主体となるのは堀尾氏が出雲国主になってからと考えられます。堀尾氏に關わる石塔は、いろいろなところで見ることができます。ほんんどが来待石です。たとえば、堀尾吉晴の墓塔は、安来市広瀬町の巖倉寺に五輪塔が残されています。吉晴の子、忠氏の宝蓋印塔は玉湯町の報恩寺に、その子忠晴の五輪塔は栄町圓成寺にあり、堀尾期藩主の来待石の石塔を見ることができます。堀尾一族や重臣も大型の来待石でできた石塔が残されています。吉晴の孫、安来市広瀬町の富田城内にある堀尾勘解由の宝蓋印塔は同じ来待石で作られた石廟（基礎



報恩寺堀尾忠氏宝蓋印塔



堀尾吉晴五輪塔（来待石）



京都市妙心寺春光院
堀尾泰晴夫妻宝蓋印塔と石廟



圓成寺堀尾忠晴墓所



五代藩主宣維廟所（墓壇の床石が来待石）

石、壁石、屋根石を組み合わせて石塔の周りを囲う上屋）の中に収められています。堀尾民部の宝篋印塔も報恩寺の石廟に納められて残っています。ほかにも数多くの一族、重臣の石塔がお墓や供養塔として建てられたことが知られています。また、堀尾家の菩提寺だった京都市北区妙心寺春光院には、吉晴の両親、堀尾泰晴夫を供養する宝篋印塔2基が、石廟に収められています。いずれも来待石製で、そのほか藩主や一族の石塔も残されています。京都までわざわざ来待石を運んでいることから考えて、堀尾氏にとつては特別な石として位置づけられていたのでしょう。

松平氏が松江藩主となった寛永期以降には、藩主の墓塔は、菩提寺の月照寺に集めて作られました。広い墓域を灯籠などで囲んで、中心に墓塔を置く例が多くなります。これは江戸時代の全国的な大名墓所の特徴でもあります。墓塔は初代直政から、9代まで御影石（花崗岩）が用いられました。江戸幕府を中心とした幕藩体制が全国に浸透していく中、墓塔の石材のブランド意識が変わったかもしれません。ただし、藩主の墓所から来待石が消えたわけではありません。灯籠や階段、基壇、石敷き、排水溝



四代藩主吉透廟所の墓壇（床石が来待石）



集められた古い墓塔・供養塔（清光院）

など、様々な場所に来待石が使われました。

一方で藩内の武士、商人、有力農民層の墓塔や墓石、供養塔に来待石の利用が広がりました。多くは五輪塔や宝篋印塔のようなものではなく、基壇に一つの石で作った墓標を載せるような単純なものです。その形は地域や宗派、身分、経済力などの違いにより一つに定まったものではありません。墓標には葬られた人（あるいは戒名）の情報やその時期、作った人などが刻まれていることが多く、それは歴史情報の一つとしてとても役に立ちます。来待石で墓石を作ることは高度成長期ころまで一般的でしたから、市内の各所で見られます。注意してみると、江戸時代の年号が刻まれたものも少なからずあります。お墓の形の違いや年代の違いなど、細かく観察すると、お墓一つでいろいろな情報があることがわかるはずです。

②灯籠

灯籠の起源 来待石といえば灯籠を思い浮かべる人は多いと思います。灯籠の起源は、寺院の前に献灯するために立てられたもので、日本では飛鳥時代（7世紀）にまでさかのぼります。現存する最古の石灯籠は奈良県当麻寺の八角石灯籠です。松江では山代郷北新造院金堂の前に灯籠が立てられていたことがわかっていますので、少なくとも奈良時代（8世紀）には存在していましたが、それが来待石だったかどうかは不明です。ただ、新造院では多くの来待石を用いていて、灯籠が来待石で作られた可能性もあると思います。当初は堂塔の前に一竿建てられていたものです。



栄町圓成寺六角地蔵燈籠



四角い燈籠（外中原町清光院）



右燈籠の宝永四年（1709）紀年銘

神社や庭園への広がり やがて神社にも灯籠が立て始められ、安土桃山時代ころからは茶の湯の影響によって庭園にも用いられるようになります。また、2つの灯籠が一対で建てられるのも後のことです。

出雲での古代の灯籠の存在はわかりますが、平安時代から中世にかけて、証拠がなく、詳細は不明です。一方で来待石の灯籠が江戸時代には盛んに作られたことは確かです。古い寺社の灯籠の基壇や竿に年号が刻まれているものがあり、江戸時代に作られたものとわかります（後の再建の時に文字も写された可能性もあり、注意が必要です）。

寺社以外でも、江戸時代以降は庭園などでも灯籠が立てられました。今でも盛んな茶の湯です

火袋が六角の春日形灯籠
(城山稻荷)

左灯籠の寛政12年(1800)紀年銘
(再建の時に文字も写した可能性があります)

が、茶室の庭園にも灯籠がしつらえられていることが多いのは有名です。昔門院観月亭庭園や明々庵庭園などで来待石製の灯籠をみることができます。古い屋敷にも、大小の庭園が造られていることもあります。



石灯籠と狛犬 (阿太加夜神社)



右燈籠の紀年銘 (天保6年 (1835年))
(再建の時は文字も写した可能性があります)

く、その一部として灯籠が用いられていることもよくあります。武家屋敷を住まいとした小泉八雲旧居の庭にも複数の灯籠がおかれています。灯籠は現代でもお庭を中心によく建てられています。多くは来待石製でしたが、近年新しく建てられたものは、安い外国産や

国内の主要産地で採掘された御影石が用いられることも多くなりました。

墓塔と灯籠 江戸時代には墓塔が作られることも広がります。大きな墓所では献灯用の灯籠が立てられます。また、通常の墓所でも来待石の灯籠が一対で建てられるようになり、その後、明治から現在まで続いている。

来待石の灯籠は出雲だけで用いられたのではなさそうです。近年、主に日本海沿岸の各地で来待石の灯籠ではないか、と考えられる灯籠が見つかってきています。詳細は狛犬の項で述べたいと思いますが、江戸時代後期から明治にかけて発展した北前船に乗せられ、広がった可能性があります。

③松江藩主別荘お茶屋のお風呂 玉造温泉は奈良時代（8世紀前半）に書かれた『出雲国風土記』にも温泉として記載されている歴史ある名湯です。江戸時代には、松江藩主の別荘御茶屋が設けられました。もちろん、藩主やその家族が温泉につかり、ゆっくりと過ごすためのものですので、温泉が引かれて、立派なお風呂が作されました。場所は温泉街に



笠が苔むす石灯籠 (川原神社)



笠が苔むす石灯籠
(出島神社、文久元年銘文あり)



玉造温泉の松江藩主別荘お茶屋浴室跡

流の泉源があるところでした。

平成18年度には発掘調査が行われ、お茶屋の一部の様子が明らかになりました。お風呂場には半分地下に埋め込む形で、内法が2.97m×2.36m（10尺×8尺）の浴室が見つかりました。浴室の床と周りの壁には、丁寧に加工した来待石の切り石が使われ、隙間に漆喰が塗り込まれていました。殿様が入浴する浴室だけあって、特別なしつらえがしてあります。加工しやすいだけでなく、独特の風合いを持つ来待石がわざわざ選ばれたものと考えられるでしょう。

近くには源泉が東西2か所あり、東側の源泉は外形35cm、長さ60cmの来待石で加工した円筒の上部に花崗岩の蓋を乗せたもので、西側は外形26.5cmの来待石で加工した円筒の上部に来待石の蓋を乗せたものとなっています。ここでも来待石が使われています。

玉作湯神社のすぐ北側に当たるこの地は、史跡整備が行われ、お風呂場も復元されています。源泉や湯薬師さんにも近く、街や観光の中核として県内外の人から親しまれています。

④狛犬（唐獅子）

狛犬のはじまり 来待石として灯籠とともに、双璧をなすのが狛犬でしょう。前置きですが、松江を中心に出雲地方では、つい最近まで唐獅子と呼ばれていました。狛犬のルーツをたどると、寺院の仏像の前に木彫のライオン（獅子）が置かれていたことにあるようなので、この地方の唐獅子という呼び名は、古様を保った表現だったとも言えますし、実際の表現も獅子です。平安時代には片方が犬になり、やがて総体として狛犬、と呼ばれるのが全国的傾向のようです。ここでは古来からの「からしし」と呼びたいところですが、今は市民の



玉作温泉の松江藩主別荘
お茶屋浴室の復元
(桧風呂の周りが来待石)



木製狛犬（八重垣神社）

大多数が「こまいぬ」と呼んでいるようですので、狛犬として記していきます。ちなみに八重垣神社に木製の狛犬が伝わっており、市の指定文化財となっています。のちの狛犬と比べると、前足の置き方や耳や顔の表現方法、装飾の入れ方などに大きな違いがありますので、当地の石製狛犬はこのような木製のものから発展したものではなさそうです。ただ、石製狛犬のモチーフが、どこのどのようなものだったかは不明で、今後の調査が必要です。

「来待スタイル」の狛犬 さて狛犬は、神社の入り口に一対の狛犬が鎮座しているのが普通の風景だと思います。時にはお寺の境内に置かれる場合もあります。少なくとも江戸時代の後半ごろ以降は、当地方の狛犬の大部分は来待石で作られています。2010年に広江正幸さんと永井泰さんが著した『出雲・石見 狛犬見聞録』(ワンランク刊)によると、出雲には千体以上もの来待石狛犬があるようです。しかし近年では、風化しやすい来待石は避けられる傾向にあります。

ところで、通常狛犬は片側が口を開き（阿形）、向き合う方（吽形）で、向こう側は口を固く閉じています（吽形）。そして来待石の狛犬の形には一定の約束事があり、「出雲」や「出雲式」「出雲型」などと呼びならわされています。全體の形としては、腰を上げて今にも飛びかかろうというポーズでお尻や尾を大きく上げて立っている「クラウチングタイプ」（陸上短距離のクラウチングスタートから仮にそう呼びます）と、前足と後ろ足をくっつけて揃え、礼儀正しく蹲踞している「お座りタイプ」に大別されます。クラウチングタイプとお座りタイプは、片や動的で迫力たっぷり、片や前足を体の近くにそろえてちょこんと座っており、対照的なことも意識的な作り分けでしょう。どちらも尾が体から独立して立っていることや耳が寝ていることも、おおむね共通の特徴です。松江の石工が、江戸時代の少なくとも後半には来待石を使って作成し始め、確立したスタイルだと考えられます。このスタイルをもつ狛犬は「来待スタイル」と呼んでみましょう。



阿形の狛犬（東生馬町生馬神社）



吽形の狛犬（東生馬町生馬神社）



大垣町内神社狛犬と灯籠



内神社狛犬

お尻を上げた狛犬
(八幡町平浜八幡宮)お尻を上げた狛犬
(美保関町片江玉結神社)美保関町七類明島神社狛犬
(明治34年銘)

玉結神社の石垣の下に鎮座する狛犬

狛犬の歴史 狛犬にも年号が刻まれたものがあり、造立年が大まかにわかるものがあります。今のところ、玉湯町の金刀比羅宮の狛犬に刻まれた天明2年（1782）が最古になるようです。ほかにも江戸時代後半にまでさかのぼるものが多くあり、美保関町の美保神社には文化10年（1813）の紀年銘のある大型の狛犬もかなり古いものとなります。狛犬は現在、外に一対で鎮座されていますが、その歴史をたどると古くは寺院や神社の建物の中や縁に置かれていたようです。



出雲で最古級とされる狛犬（玉湯金毘羅宮）

少なくとも平安時代には、木製や銅製のものが奈良県の薬師寺や春日大社など大きな社寺に残されています。『枕草子』や『徒然草』にも獅子の記述があります。最古の石造は東大寺南大門にある獅子と言われ、双方とも獅子です。佐草町の八重垣神社には、随神門に木造の狛石が置かれており、室町時代のものと言われています。戦国時代以前は、大規模な社寺や貴族たちの魔除けや神仏守護の置物でしたが、その後、江戸時代になって庶民的な狛犬が多くの社寺の参道などに置かれるようになりました。



東忌部町忌部神社狛犬一対



忌部神社狛犬



出雲金刀比羅宮狛犬



大井町大井神社狛犬

賀豆紀神社保存の狛犬
(昭和の名工、新出九一郎作)



雄賀町賣豆紀神社歳徳神を護る木製狛犬
(石狛犬を模倣している)



奥谷町田原神社の大型狛犬

全國に広がる来待スタイル 注目すべきは来待石の狛犬は、江戸時代から明治にかけて、日本海航路に乗って北海道から九州まで広がっていることです。京都市伏見区藤森神社にある文政3年(1820)を最古に、北海道、山形、栃木、千葉、福井、兵庫、香川、山口、佐賀、長崎などで存在が知られています。後で出てくる石見焼や石見瓦とも関わりますが、船荷となって交易品としてひろがり、出雲の產品としても名も知られていたようです。特に北前船が最も盛んになる明治期以降、多くの来待石で作った狛犬や石灯籠が商品として日本海沿岸を中心に出回っていたことと思います。来待スタイルの出雲狛犬が江戸狛犬、浪花狛犬とともに、「日本三大狛犬」の一つとされるのもうなづけます。



左：三吉神社（北海道稚内市）拝殿前の狛石、右：沼浦神社（北海道利尻富士町）の狛犬
(内山真澄・西谷榮治・藤沢隆史・高畠孝宗・山谷文2009
「宗谷管内所在の狛犬」『利尻研究』69-82 利尻博物館より)

稚内や礼文島周辺の狛犬調査では、来待石らしき砂岩で作られ、出雲の様式を兼ね備えた狛犬の存在が確かめられています。また浜田の客船帳に礼文島の神社への寄進者の名前があることも知られており、北海道最北にまで広がっている可能性が高いことが分かっています。



左：石狩弁天社（北海道石狩市）の狛石、右：彌高神社（秋田県秋田市）境内の石灯籠
(阿部史朗氏提供)

⑥石仏・石像など



西生馬町山中の石仏

お地蔵様など 狛犬に限らず、信仰にかかる様々な石造物に来待石が使われました。代表の一つが、お地蔵様です。お地蔵様は正式には地蔵菩薩といい、お釈迦さまが入滅してからの無仏時代のこの世の人々を救済する役割を担っているとされ、苦惱の人々を救う存在とされます。インドで仏教が成立し、6世紀に日本に伝わってきて以来、信仰が続き、やがて庶民にも広がる中でとても身近な存在となりました。古い木彫の地蔵菩薩が伝わる寺院も少なくありませんし、来待石で立派な台座に乗る地蔵菩薩もあります。でも、一般にはお墓の入り口や路傍に佇むお地蔵様への親しみは強いと思います。小さなお地蔵さまは、なか



お地蔵様（独立した2体の左に2連のお地蔵さまが2つ並んで、六地蔵となっています。東生馬町法恩寺）

なか年代を確定するのは難しいことですが、江戸時代から作られていたことは間違いないと考えられます。特定の信仰に結び付いているわけではなく、様々な願掛けや村の平穏を祈って置かれたものが多いのではないでしょうか。ただ、子どもの安穏や亡くなった子どもの供養のために建てられることや、病気平癒、道祖神（村の境界の守り神）などでお参りされる例が多いようです。赤い前掛けをされているのは、子どものための信仰が反映したものでしょう。お地蔵さんに限らず、仏教にかかわる様々な仏様が来待石で彫られ、お寺や路傍などに設置されて信仰を受けていました。仏はその種類によって、庶民から様々なお願いがかけられ、大切に引き継がれてきました。



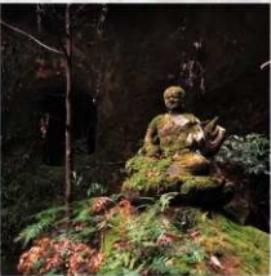
宝曆6年(1756) 銘の地蔵菩薩像(外中原町清光院)



東長江町金剛寺の阿伽井觀世音座像



玉湯金毘羅宮のカラス天狗像



穴道町岩屋寺の不動明王座像

お稲荷さん お稲荷さんといえば、狐の彫像を思い起します。松江周辺のお稲荷さんには、多くの石造の狐が見られます。狐は稻荷神のお使いをする靈獸で、神さまそのものではありません。一般的には狛犬のように、社の前に鎮座しているたり、社殿周りや境内地に数多く置かれたりしていますが、ご神体のように祠の中に狐像が収められている場合もあります。もとは五穀豊穰をつかさどる農業の神ですが、今は商売繁盛をはじめとした産業全体の神とされ、全国でも広く信仰されている神の一つです。松江周辺には小祠も含めて多くのお稲荷さんがおり、来待石で作られた狐を目的にする機会は多いと思います。松江城内にある城山稲荷はとくに有名で、明治23年～24年（1890～1891）に島根尋常中学校、師範学校の英語教師として松江に赴任したラフカディオ

玉湯町布志名若宮神社の
お稲荷さん

城山稲荷神社の石造狐像



城山稲荷神社境内の居並ぶ狐像

ハーン（小泉八雲）は、二千以上もある石狐を珍しがり、通勤途上でよく立ち寄った、といいます。大部分は来待石で、今でも多くの狐を見る事ができます。

独立した稲荷神社のほかに、市内の神社の多くには、境内にお稲荷さんが祀られています。とくに江戸時代に稻荷信仰が松江の全体に広がり、大切にされていましたと考えられます。そのようなお稲荷さんには、来待石を中心として、大小の狐の像が奉納されて例が多くみられます。神社の拝殿・本殿をお参りするだけでなく、周辺の小さなお社や祠をお参りしてまわるのも楽しみです。



阿太加夜神社境内の稻荷社の狐像

祠など信仰にかかわるもの 日本では仏様を祀る寺院や古来の神々を祀るお宮のように、整えられた信仰のほかに、村ごとに生活に密着した信仰が代々守り伝えられてきました。松江はそのような小さなおまつりごとや、その痕跡がまだ残されていることが特徴です。たとえば、荒神さん、サイノカミさん、地神さん、歳徳神さん、シャニチさんなどの信仰です。これらは地域によって様々な形をとりますが、信仰の対象として小さな祠や碑などを置いたり、神前に灯



来待石で彫られた蛇神
(平浜八幡宮裏山)



籠を置いたりしているものをよく見かけます。特に荒神さんのお祭りは、しっかりと続けられている地区が多く、樹木などに藁編で作った蛇が巻き付けられているのをよく見かけます。その前には灯籠や蠟燭立ての小さな石造建物などを置くものも多く、藁を得にくい地区では石の祠や石の蛇を常置している場合もあり



阿太加夜の荒神さん根元の石造の小祠



東出雲町阿太加夜地区的荒神さん
(阿太加夜神社)



玉湯金毘羅宮の来待石製社殿 (石工頭林兵衛作)



山代町の荒神さんと
その前に立つ灯籠



左灯籠の紀年銘
(弘化4年 (1841))



雑賀町賀豆紀神社境内の
地主荒神と祠



来待石製小祠
(加賀日御碕神社)



土手町の荒神さんの石造祠



田の中の小祠
(東生馬町)



来待石製小祠の連なり
(玉湯町湯町八幡宮)



西浜佐陀町満願寺の供養塔
(文政元年 (1818) 銘あり)

ます。

⑥江戸時代の様々な利用

まち中の来待石 江戸時代には他国出し禁制の品として他藩への移出が制限される中、来待石は松江城下町の基礎石や石垣、暗渠や水路、石段、棟石などの建築材として重用され、現在でも市内の各所でその様子を見ることができます。また近代以降昭和ごろまで、生活の道具としての石臼やかまど、こたつ、井戸枠など多様な使われ方をしました。また神社の狛犬、祠、記念碑などに、その利用は続きます。各種の信仰に関わる祠やお地蔵さまなども、いまでも各地



玄関の石段（武家屋敷）



門の屋根の棟石（小泉八雲旧居）



石垣の暗渠（後ろは県議会棟）



石垣の修復で用いられた来待石（清光院）



屋根の棟石（武家屋敷）



町境の古い水路
(西茶町)



道標石
(八幡町、昭和63年再建
とあり、おそらく江戸時代からあったものと思われる)



如泥石
(布志名湖岸に並ぶ)

に残っています。

江戸時代後期には、日本海航路による交易の発展とともに、建材や石灯ろう、狛犬など様々な来待石製品が、全国各地へと盛んに運ばれていきました。当時の製品は、北海道から九州まで各地にみられます。これから研究が進めば、まだまだ各地で来待石の製品が見つかること思います。

如泥石 変わった利用のされ方をしているものとして、来待石を加工した石臼のような形の「如泥石」があります。白湯周辺は宍道湖から東へ向かう水の流れが強いところで、湖岸が浸食されやすかったようです。そこでこの如泥石を湖岸に並べて、今で言えばテトラポットのように護岸をしていました。直径と高さが同じ60センチ(二尺)の円筒形で、その上下面には丁寧に円形の溝が彫られています。波を吸収しながら消波するようにデザインされたといわれます。規格を決めて、量産化され、護岸の建設や修理に使われたものでしょう。今も嫁が島の周囲や白湯公園の一部、袖師の石仏の基礎で使われています。



建物の基礎石
(塩見縄手の武家屋敷)



如泥石(宍道湖岸のお地蔵様の基礎)

如泥石は、松江藩7代藩主松平治郷（不昧）お抱え彫刻師で、多くの名作を残している小林如泥にちなんで名づけられたと考えられます。いつから使われるようになったのか明確にはなっていません。これからの調査研究が必要です。日常生活の中の来待石 来待石は江戸時代から近代以降まで、生活の様々な場面で利用されました。硬いことが条件の用具として、様々な鉢として、あるいは堅いものを叩く・擦るものに来待石は利用されました。鉢の代表は、井戸鉢です。江戸時代の城下町を発掘すると生活用水確保のための井戸は必ず出でますが、来待石を円筒形にくりぬいたものが一般的です。明治になって上水道が普及するまでは、井戸が不可欠でしたし、戦後になんでも井戸が利用され続けた家も多いと思います。そのほかには、生活上に必要な水ため（今でいうシンク）などもそうでしょう。



来待石の石臼と硯（左）



発掘調査で出てきた来待石の井戸鉢（魚町）



来待石の石臼

食料加工の道具としては、石臼が多く作られました。多方向の筋を入れた平坦面のある円筒を、二つ合わせて回転させ、穀物やお茶などを粉にするのに用いられました。また餅などをつく石臼も重要な道具でした。

②軸薬としての「きまち」

赤茶色の石見焼 江戸時代後期、19世紀ころからは来待石は意外な用途に広がります。石見焼の大甕（ハンド）や石見瓦軸薬として、石を切ったくず石が



石見焼大甕（松江市東生馬町）



松江市内、畑の石見焼大甕



石見焼大甕底のスタンプ



近世末～戦後の石見焼現存状況（阿部史朗氏提供）

利用されるのです。赤茶色に発色するこの軸薬は、断水性や耐塩性が強く、水がめや寒冷地の瓦としてとても優秀なものです。松江でも、海風が吹き付ける日本海側の浦々で、石見瓦の家の目にします。また畠の水甕とともに市内至る所で見かけます。また断水性が強い特色は、その後焼酎瓶や硫酸瓶への利用、



19世紀の布志名焼
龍図花瓶（松江歴史館蔵）



黄釉に微細画が描かれた
布志名焼



黄釉の布志名焼急須

いられたと言われます。黄釉は布志名を代表する生地色の一つで、淡黄色の透き通るような釉は改良が進められ、明治～大正時代には、海外への輸出品として、上品な黄色の上に繊細な絵付けをした優品が数多く作られました。現在も続く布志名焼でも、利用される釉で、青いぼてぼてで茶碗に使われた釉とともに、布志名を代表する色として知られています。



茶壺の内側の施釉などにも用いられ、様々な産業にも力を發揮しました。松江藩の布志名焼なども来待釉を取り入れて、色のバリエーションを増やしてきました。一方で江戸時代の終わりから明治時代まで、北前船の発達により、北海道から九州まで、大甕・すり鉢や石見瓦が流通したことが分かっています。特に明治時代の後半ころには石見焼組合も結成され、大量の製品が海を渡り、朝鮮半島や樟太にまで運ばれています。組合が設立された後は、器の底に「石見」の小さなスタンプが押されることもあり、その広がりを確かめる絶好の証印となります。この赤茶色の釉は、「きまち」として陶器の釉薬の呼び名となっており、現在でも来待釉として販売されています。柿釉とも別称され、焼き上げると赤茶色になりますが、単純な色ではなく、見る角度によって様々な発色をし、魅力的です。

布志名の黄釉 また、白来待も釉薬として利用されました。江戸時代

後半に藩窯とし
て開かれた玉湯

町布志名焼は、
黄色い釉薬が一
つの特徴で、白
来待の石粉が用

4. 現在の出雲石灯籠から現代アートまで



出雲石灯籠（来待ストーン）



来待石の石切場（『松江市史』史料編「自然環境」より転載）

伝統工芸品・出雲石灯籠 来待石は現代に至るまで様々な用途で利用され続けています。特に出雲石灯籠は、昭和51年に通産省（通商産業省=現・経済産業省）から石燈籠では伝統的工芸品の第1号「出雲石灯籠」に指定され、全国各地に出荷されるようになったほか、アメリカやヨーロッパにまで輸出されるほどの高い人気を見せるようになりました。その形は様々ですが、円柱状の竿の上に六角形の受鉢、火袋、笠が乗る「春日形」と呼ばれるタイプが多くみられます。同じ六角形でも笠が長いものや火袋の形が異なるものなど、自由な発想



灯籠の部分名称



大庭町神魂神社の灯籠群

で、伝統の上に新たな形が生まれています。ほかによく目にする形として、竿が四角形でその上部も四角形でそろえるタイプ、主に庭園用として竿がなく足を広げて据えてある雪見灯籠などがありますが、自然の石を間に組み合わせた、形式を意識していない灯籠もよ

く目にします。伝統的な形式を引き継ぐもの、伝統を意識しながら変異を加えたもの、他の地域や現代の発注者の要望にも応えて時代の形式を組み合わせたもの、新しい感覚のデザインのものなど、出雲石灯籠はパラエティに富んだものとして発展してきました。

さて、松江周辺の寺社や墓地では、明治時代以降の来待石で造られた灯籠も見ることができます。切り出されてすぐの来待石は青みがかった色合いをしていま

すが、時がたつにつれ色は変化し、味わい深い茶褐色になっていきます。苔がつきやすいことも相まって、江戸時代以降から現在まで、家庭にも多く用いられています。



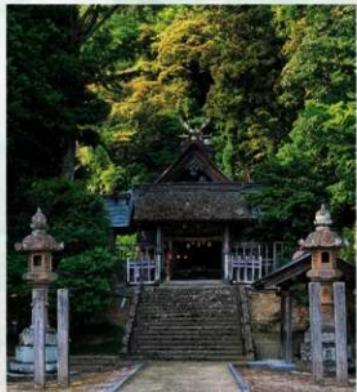
松江歴史館庭園の灯籠



忍部神社の石灯籠一対



西浜佐陀町出島神社の石灯籠



大垣町内神社の灯籠

その他の石造物 また、寺社の狛犬・狐・地蔵・石塔などの石造物には、現在でも伝統的に来待石で作られているところもまだ多くあります。許曾志神社では狛犬の代わりに鶏と猿が来待石で作られており、参拝者を出迎えてくれます。田原神社には、写真の鹿をはじめ、様々な動物たちが鎮座しています。そのほかにも、探してみると様々な来待石の石造物が、寺社や町の中に置かれたり、利用されてたりします。好みにもよりますが、淡い茶褐色の来待石の風合いは、白い御影石に比べて制作当初から古色を感じ、寺社や庭園の景観に歴史的景色を加えているように感じます。松江の歴史的景観を担う石材として、長く使われていくことにより、伝統的な産業の振興にも役立っていくものと思われます。

雪見灯籠
(竹矢町安国寺境内)土手町荒神社の蛇
後ろには来待石の祠

稲荷社の狐（揖屋神社境内）



古曾志神社の猿と鶏



近年の大型狛犬（佐太神社）



奥谷町田原神社の鹿

石碑 また、鳥取県米子市淀江町の天神垣神社境内には約120年前の明治36年（1903）に石馬頭彰碑（米子市指定文化財）が建立されていますが、これが来待石製です。明治34年（1901）に東京帝国大学人類学教室の坪井正五郎博士を

西伯郡教育会が招聘した際に、淀江町の石馬谷古墳にあったとされる石馬の学術的重要性が指摘されました。坪井の勧めもあり、地元有志からなる石馬保存会により、文化財保存施設としての当該石碑が建立されました。鳥取県でも、重要な歴史の顕彰碑に来待石が選ばれていたのです。石馬は、後に国重要文化財に指定されています。

松江城馬道に立っている「松江城碑」は明治35年（1902）に松江城の意義を検証するために建てられたものですが、やはり来待石が使われています。同様の例は、市内にたくさんあると思います。

墓石や石段、石垣なども高度成長期くらいまでは来待石が使われ続けました。しかし、社会構造の変化、嗜好の変化による御影石などの人気の高まり、特に安い石材が大量に輸入されるようになって、伝統産品の一部を除いては来待石が利用される頻度は低くなっています。



石馬頭影碑（米子市淀江町）



松江城馬道の「松江城碑」

来待石の風合いを活かした新たな特産品へ 一方でその風合いを生かした新たな商品の開発も行われています。建築壁材、間接照明や玄関等の置物、様々なオブジェなどアートストーンとして人気です。宍道湖大橋南詰にたつ巨大な灯



青柳楼の大灯籠

松江の町を歩くと、観光案内の道標として、また『出雲国風土記』登場地の説明板・柱標の材料として使われているのを目にすることができます。古い建物や古色を帯びた来待石が見られる松江には、

現代感覚で作られた来待石製品を街角で見ることができます。新旧の来待石を探してまちあるきをするのも楽しいのではないでしょうか。



来待石の道標



出雲国風土記登場地の碑



玉湯町の公園街灯

籠（あわやとうら） 篠（青柳楼の大灯籠）も来待石製で、宍道湖の景観とマッチしたメニューとなっています。もとは白潟天満宮裏の料亭、青柳楼にあったものを移設したとされていますが、来待石は新調したものと推測されます。宍道湖大橋北詰の須衛郡久神社にも大灯籠があり、水の都の景観の一部をなしています。一般的の灯籠にも、工夫を加えたデザインの製品が登場してきました。

松江の町を歩くと、観光案内の道標として、また『出雲国風土記』登場地の説明板・柱標の材料として使われているのを目にすることができます。古い建物や古色を帯びた来待石が見られる松江には、現代感覚で作られた来待石製品を街角で見ることができます。新旧の来待石を探してまちあるきをするのも楽しいのではないでしょうか。



来待石の加工品



III. 様々な石材のストーリー

1. 松江城築城に使われた石

以上の2つの石のほかにも、松江城の築城や城下町造りに、矢田石、大海崎石、急部安山岩、忌部御影（花崗岩）、島石などが用いられ、今も見ることができます



松江城二の丸下の段の石垣
(大きく4種類の石で
積まれている)

おり、建築では日本的な屋外空間のアイテムとして使われています。大橋川拡幅工事の護岸では島石が多く使われているので、川辺を散歩すれば確認することができます。

明治天皇の在所を目的に建造された松江城二之丸の興雲閣では、建物の土台として島石が亀甲状にきれいに積まれています。また、バルコニーやピロティの柱の基礎石にも島石が用いられ、土台が六角形、柱基礎が円柱



興雲閣の土台石積



切り込んで積まれた島石の基壇
(島石の上に重なるのは来待石)



新たなデザインの灯籠(東出雲町出雲金刀比羅宮) 灯籠の上で構える狛犬(西川津町熊野神社)



興雲閣柱基礎石

状に加工された上に縁取りや段など、丁寧に装飾しています。丈夫で、黒地に気泡の模様が見える島石が、建物の風格を高めています。



天守の石垣（矢田石）

矢田石 現在の東光台団地から大橋川に向けて分布する石材です。松江城の中では天守の石垣のほとんどに矢田石が用いられています。そのほかでも、比較的古い築城時と考えられる石垣でよくみられるため、築城に当たって船で大量の石材を運ぶため、大橋川に面して産出した矢田石が、まず運ばれたことが推測されます。矢田石に堀尾家の家紋、分銅文がよく刻印されていることもそれを示しています。玄武岩質安山岩でとても固く、石垣に適したものだったのでしょう。

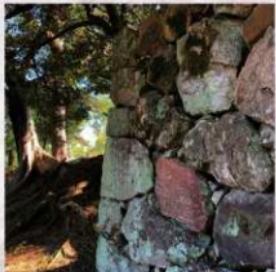
忌部御影 忌部御影は、中国山地に広

がる花崗岩のつながりで、採掘できます。石英や雲母が混成して見た目が美しく、丈夫なため、松平家藩主の墓所は代々御影石が用いられました。当初は著名な兵庫県神戸市六甲山付近の本御影など、藩外のブランド石が使われましたが、後半期には地元の花崗岩が用いられています。花崗岩が風化した部分は、いわゆる真砂と呼ばれる排水性のより砂質の良土として、敷地の造成などに現在も用いられています。松江城下町遺跡でも砂が堆積しているところがあり、その分析によれば、花崗岩由来で忌部周辺から運ばれた可能性が高いそうです。橋北にまで運ばれたのは、それだけ排水性がよく盛土に適した砂礫だったことがわかります。



忌部御影の現代の石垣（東忌部町）

大海崎石 松江城の石垣で多用されているのが大海崎石です。大橋川の東側に面していることから、船での搬送に有利だったのでしょう。江戸時代の城下町でも利用されていました。やや赤っぽい色で、現在は松江歴史館の基礎の石垣で見ることができます



松江城の石垣
(やや赤っぽいのが大海崎石)



松江歴史館の基礎石垣
(やや赤っぽいのが大海崎石)

忌部安山岩 松江城石垣に用いられている忌部安山岩（長黒石）は、国宝神魂神社本殿の土台や石段、石碑にも用いられています。近年造立された神魂神社社碑の文字を刻んだ部分は新鮮な岩の面が見え、長黒石と呼ばれる美しい黒色を観察できます。忌部地区では、家の石垣などを忌部安山岩で積んでいるところも見かけます。



大庭町神魂神社本殿の
忌部安山岩の基礎



神魂神社忌部安山岩の標石
(風化した面と新鮮な面)

島根県庁は元の松江城三之丸の上に建っています、府舎北東の庭園隅には「松江城三丸舊址」の石碑が立てており、その碑の石材は忌部安山岩です。土台は森山石が使われています。



松江城三丸碑
(忌部安山岩、基壇は森山石)



松江城石垣で主に使われた石の産出地

2. 各地で使われた石



柱の基礎は島石、基壇は来待石（法吉町常福寺）乃白町野白神社の石垣



石の性質で使い分ける 前に取り上げた来待石を含めて、松江城の石垣に用いられたような松江の石材は、それぞれ特徴があり、石の性質や見た目に合わせて、組み合わせて用いられている例も、町上市内各地でよく目にします。



新しい割口でよくわかる忌部御影
(野白神社)



新しい割口でよくわかる忌部安山岩
(野白神社)

前ページの写真的松江城三丸碑は硬くて黒く、重厚なイメージのある忌部安山岩が用いられ、その基礎は堆積岩で年を経るごとに層状に模様が現れる森山石（後述）が使われています。建物の基礎石には硬くて丈夫な島石を、基壇には加工が容易で独特な趣のある来待石を使う例もあります。地域地域では、搬入しやすい地元の石を用いることも多いですが、忌部に近いところでは石垣に忌部安山岩と忌部御影を併用することも珍しくありません。赤っぽい大海崎石、黒くて小穴が多く硬くて見栄えもいい島石、黒くて大型の石材もある忌部安山岩、白っぽくて全国ブランドの御影と同様の忌部御影、青っぽく加工のしやすい森山石、そして切り出しやすくて、風化によって味が出来る来待石、それぞ

れの特性を生かしながら、近世～近代の石工たちは使い分けをしていたものと思います。

森山石 美保関町周辺では森山石と呼ばれる淡い青緑色の凝灰岩が使われており、美保関集落の路地を彩る青石疊通りに主に使われています。また、令和2



美保関町灯台
(森山石を積んで、のちに白いベンキが塗られています)

年に重要文化財に指定された美保関灯台も、森山石のブロックを積んで建てられています。地域で産し、地域で愛され使われ続けた石です。また、凝灰岩の堆積具合で縞状に見える石塊が、城山松江神社の手水鉢や松江城三丸薦趾碑の土台にも用いられています。

大芦石 島根町大芦地域で産する閃綠岩ないし石英閃綠岩です。実態は大芦地域だけでなく、島根半島東部各地に分布します。県庁東側の壁面、興雲閣前の西南の役記念碑、川津小学校の紫雲丸遭難記念の碑などに用いられています。大芦御影とも称されます。

水の浸食は石で護る 松江は水に恵まれたまちです。水は人間の生活に不可欠であると同時に、交通や流通にも大きな役割を果たし、松江の発展に寄与してきました。一方で、水は災害をもたらすとともに、不斷に生活に不都合な働きをします。それは浸食、つまりちょっとした雨でも水は土を流しますし、川や湖は水量を増やし水流を早くして、岸辺をえぐり取り、結果的に沿岸を崩します。



発掘調査で現れた宍道湖岸の石垣と湖に下りる石段（魚町）



美保関町美保神社横の青石畳通り

令和3年から始まった大橋川拡幅事業に先立つ発掘調査では、宍道湖から大橋川南岸の水際の様子が明らかになりました。発掘調査では、普通は土を掘っているのですが、水際では石を掘っていくイメージだそうです。つまり、強い流れから岸を

守るための護岸を、繰り返し石垣や石の護岸で修復していく様子がわかつってきたのです。しかも、石垣の裏込めにはふんだんに石を詰め、宍道湖を埋め立てて護岸や石垣を前面に広げるときは、間の空間は石で埋め立てているところもありました。まさに石でまちを広げているのです。そうした石は、松江城の石垣に用いられた島石や大海崎石などがたくさん用いられており、舟で石を大量に運んだ様子が目に浮かびます。

当たり前のように思うかもしれません、近世以前では石が少ない地域では



発掘調査で現れた石を投じた埋立地（魚町）



旧田野医院で見つかった
宍道湖岸に向かう石段



「如泥石」（白潟公園）

木を使って護岸を作っていました。杭を打ち、間に板をはめ込んで、土地に直接水流が当たることを防いでいたわけです。どちらも優れた知恵ですが、石で築いたほうが丈夫で管理の頻度も少なくなることは明らかです。江戸時代の後半ころには、前にも述べたように来待石で「如泥石」と呼ばれる円柱形に加工した護岸用の石製品が大量生産され、湖岸や川岸の強化に使われたようです。

城下町を形成していくうえでも、豊かな石は力を発揮したことでしょう。町を護り、水運を盛んにする堀の掘削はもちろん溝や区画の明示などにも惜しまなく石が用いられました。松江城下町遺跡の発掘調査では、少なくとも17世紀中ごろには、屋敷境の溝も石組で作られたことがわかっています。現在ではU字溝にあたる土を流さない溝の成立です。寺社や有力者の屋敷などにも石垣が築かれ、現在まで残されているものも少なくありません。

また、水運上見せないのが、堀に面した舟入で、石を組むことでほぼ垂直に築くことができたことは、石の効用の一つです。近代の旧田野医院の裏では、宍道湖岸に降りるための石段が、主に来待石を組んで壁を垂直に立てて設けられていました。舟で往診をしたというエピソードを裏付けるものです。中世以来、近代まで、前に述べたような様々な石を用いて土地を浸食から守ってきた歴史は、目立たないながらも松江の重要なまちづくりの要素といえます。今後のまちづくりをしていくうえで、豊富な松江の石を利用していくことは、産業振興の上でも考えていく必要があるでしょう。

3. さらに古くから使われた石

先史時代や、古代でもほかに利用された石があります。弥生時代には、全国でも早い段階で菅玉の玉作が西川津遺跡や布田遺跡で行われました。

緑色凝灰岩（玉） 石材は緑色凝灰岩と呼ばれる薄い緑色の柔らかい石です。産地の詳細はわかっていないませんが、北山山系の海岸側には、類似した凝灰岩が見られます。弥生時代前期から、緑色凝灰岩を用いて玉作

が始まされました。緑色凝灰岩に細い溝を薄い砥石で彫り、その溝をガイドにして薄い板状の素材を作り出して、それを細い管状に分割して方柱形の素材を作成し、穴をあけて菅玉を作っていました。この玉作りの技術は「西川津技法」と呼ばれており、その名の通り西川津遺跡からたくさんの玉作の過程を示す未成品がでています。竹矢町の布田遺跡からも多く出土していて、松江市の広い範囲で弥生時代に玉が作られていたことがわかっています。これが基盤となって、後の古墳時代に、メノウを使った全国最大規模の玉作が行われました。

碁石など また『出雲国風土記』には玉結浜（玉江）に基石があると記されています。今でも美保関町玉江海岸では黒色頁岩の玉石がみられます。出雲国府



島根県考古資料
島根県古代文化センター提供
(島根県埋蔵文化財調査センター蔵)



島根町玉江浜と黒くて丸い石



跡では、同様の石を磨いた碁石が出土しており、『出雲国風土記』の記述が確かにことがわかります。また、白い碁石は、水晶や石英を平べつに碁石状に加工したり、海を加工したりして用いていたよ



奈良時代の平玉製作工程

うです。
同様の黒色の石材は、縄文時代～弥生時代に、斧や石包丁（穂具）などの石材にも用いられました。また、鹿島町奥才14号墳の石棺の床には黒い玉石が敷かれており、松江市

の日本海沿岸に分布する黒い玉石には特別な意味があったと思われます。

こうした玉石は、近世以降に土間や道に黒い石を埋め込んで装飾した、洗い出し技法や、庭などでの玉石敷きなどにも用いられたことは想像に難くありません。現在でも、モルタルの表面に玉石を埋め込んで風雅な床を作られていますが、多くが工業製品となったため、玉江の石が用いられることはなくなったものと思われます。



美保関町怒津海岸にみられる黒色の岩脈



秋鹿町内神社参道脇の丸石敷き

ブランドとはなっていないものの、人間が暮らすようになって以来、様々な用途で石を使ってきました。叩き割ると、縁辺が鋭くなるガラス質の石は鉄が普及する前は刃物として重要でした。地元でとれる玉髓や水晶などのほか、隱岐の黒曜石、香川県国分台や金山のサヌカイト（古銅輝石安山岩）は3万年以上前から2千年前まで、松江周辺に持ち込まれ、盛んに使われていました。刃物になる石はそれだけ貴重だったのです。硬くて綺麗な石は、磨かれて木を伐採したり加工したりする斧として使われました。木を裂く重さと鋭さを兼ね備えた石が重宝されたと思います。

島根半島産黒色石材で作られた打製石斧
(鹿島町塙部第一遺跡出土、弥生時代前期)出雲国府跡出土の奈良時代前半の玉作関係資料
(島根県立古代出雲歴史博物館提供)島根半島産黒色石材で作られた石包丁、石剣とその未成品
(鹿島町佐太前遺跡出土、弥生時代)黒色石材で作られた磨製石剣
(田和山遺跡出土)

製粉や砥ぎのための石 河原で転がっている丸くて硬い石は、木の実を叩いたり擦って粉にするのに用いられ、その用途は石臼に引き継がれて近年まで使われていました。今でも石臼引きを売りにするお蕎麦屋さんなどがありますね。砥石は3万年以上前には、石斧を研ぐために使われ始め、弥生時代の中ごろからは鉄製品を研ぐためにも使われるようになりました。粗砥は砂岩、凝灰岩など、仕上げ用には泥岩や粘板岩が主に使われたようです。成分に硬いガラス質（石英など）が含まれるもののが適していると考えられますが、このあたりではどこで採取される石かはわかっていない。今後の課題です。砥石は現在も使いますが、大部分が合成砥石です。しかし、刀や包丁などの上等な刃物には天然の砥石が使われているそうです。

硯 文房具として重要なのが、墨を擦る硯です。

近代までは筆記用具の主体は筆でしたから、重要な道具です。日本には漢字とともに大陸から入ってきたものと考えられます。近年の研究で弥生時代中期（約2200年前）には、硯とともに伝来していたものと考えられています。最古級の硯は田和山遺跡で出てきており、朝鮮半島を治める漢の出先事務所、樂浪郡とソックリなものもあります。当時の硯は今と



違って、墨粒を叩きながら擦る方式で、薄い長方形の板に墨をこすった跡が残っています。田和山遺跡は、大陸文明の玄関口として栄えていたことがうかがえます。飛鳥時代以降は現在と同じような墨だまり（海）がある硯が使われますが、古代は須恵器という焼き物で作られることが多く、中世以降に現在のような石の硯が普及していきます。今でも芸術としての書道はもちろん、書き方として学校でも習字を習い、硯は一般に普及しています。



京店通りとカラコロ広場を結ぶ通り
(壁面を島石と来待石でシックに彩っている)

そのほか、前に記したように美しい岩石は宝飾の一部として、硬くてガラス質の石は火打石として、加工しやすい石は建材などのインフラ整備や石造物、石碑などに今でも用いられます。人間の石利用の基本的性質は、硬くて永続性があることが一番でしょう。石によって様々な利用法があり、変化しながら、時に材質を金属に変えながら、今の私たちの生活に根付いているのです。

IV. 石が語るヒストリー

以上のような石にかかわる歴史文化をそれぞれ調査、研究を進めて個別の情報発信をしていくとともに、松江の石としてヒストリーを紡ぎ、活用していきます。松江の石は豊かな歴史を持ちますが、特筆すべき歴史的ストーリーとして次の3点を挙げたいと思います。

○2000年続くパワーストーン（ジュエリー）メノウ

松江市花仙山（玉作山）から採取された青メノウ（碧玉）は、弥生時代後期（西暦1年ごろ）から玉として加工されはじめます。古墳時代中ごろ（4世紀後半）には赤メノウや水晶でも玉が作られ、赤、青、白の色とりどりの玉が出来ブランドになりました。玉作は古墳時代の終わりまで（7世紀前半）続き、莫大な玉作山の玉が全国に流通しました。それは単なるアクセサリーを超えて、つける人々の地位のシンボルとなりました。奈良時代に再び作られた玉作山の玉は、天皇家や大豪族などに献上されました。そして近世・近代にはその魅力が見直され、現在に至るまで深遠で魅惑に満ちたメノウがアクセサリーや飾り物として重宝されているのです。

○日本海側を席捲した来待スタイル

加工しやすく、独特の色合いと風合いを持つ来待石でできた狛犬は、江戸時代には出雲地方全域で使われ、やがて北前船に乗って北海道利尻・礼文まで運ばれました。来待の狛犬は地元で唐獅子と呼ばれるように、獅子としての迫力を備えたスタイルを確立。後ろ足と尾を立てて身構える「クラウチングタイプ」と前足と後ろ足をそろえて行儀よく座る「お座りタイプ」の2つの形があり、独特な装飾とともに他の地域の狛犬との違いを引き立てています。いまでも新しく作りえるときには、この二つのスタイルを守った狛犬が選ばれることが少なくありません。出雲石灯籠も、狛犬同様に広く用いられ、現在でも伝統工芸品として生産されています。

もう一つ、姿を変えて日本海を旅したのが来待釉です。来待石の粉を高温で熱して溶かすと、赤く発色し、水を遮断する強いガラス質となります。この性質をうまく生かしたのが石見の瓦と石見焼の大甕（ハンド）です。気温が下がっても氷結しない石見赤瓦と水瓶（ハンド）は、機能性と美しさが相まって、江

戸時代終わりころから日本海を通じて広く利用されました。現在、北は樺太、西は韓国、南は鹿児島まで石見焼大甕が分布することがわかっています。来待は直接流通することで、彼の地の生活を支えるとともに、やがて陶器の大産地では、ほとんど水を通さない釉薬として利用が広がり、茶壺や土管などにも同様の釉薬が用いられるようになりました。それは、日本の近代化を支える要素の一つでした。また、今でも梅干しつぼなどには、石見焼大甕の様式が引き継がれているのも、来待が与えた影響の大きさをうかがうことができます。

来待スタイルは隠れた松江のアイデンティティの一つといえましょう。

○石に恵まれた町

松江市をまわると、生活に密着して石が多く使われていることに気づきます。住宅地の周囲の石垣や石段、川や池、水海の護岸、水路の石組、石のタイルによる舗装など、比較的古いものは地元の石材が用いられています。近代までは、生活の道具にも様々な地元の石が利用されてきました。石はどこにでもありますように思いがちですが、人間が使える石は実は限られています。松江の周辺は持ち出しやすくて使いやすい石に恵まれているのです。重い石を運ぶために便利な水運が発達してきた歴史ともかかわりが深いでしょう。メノウや来待石は、いわば松江のブランド品ですが、そのほかの石も松江の生活や文化に自然になじんで、松江らしい風景や景観、生活文化を形作ってきたことに気づくと、気持ちが豊かになると思いませんか。

以上のような松江の石のヒストリーは、磨けばもっともっと光りますし、新たな魅力も現れるでしょう。それぞれに調査研究で跡付けて、松江の歴史文化の代名詞に育てていくことができます。また、玉の素材や建材など、松江市の石文化と共通項を有する石川県小松市の日本遺産『珠玉と歩む物語』小松～時の流れの中で磨き上げた石の文化～をはじめとして、全国の様々な石の文化を有する地域と連携した研究や活用を進め、将来的には石の文化ネットワークによる相乗効果を目指します。

ヒストリー作成体制

- ・事務局：松江市文化スポーツ部松江城・史料調査課、
文化財課
- ・本文編集執筆：丹羽野裕が下記協議会および事務局内
で協議をして執筆した。
- ・松江市文化財保存活用計画協議会構成員（令和4年
度）
　　齋宣田佳男（会長）、木幡均、小林准士、津村宏臣、
　　石山祥子、鶴鶴順、伊藤知恵、長野正夫、河野美知、
　　島根県教育庁文化財課、島根県観光振興課、
　　松江市観光振興部、松江市教育委員会学校教育課

松江市のヒストリー集

松江の石をめぐるヒストリー

令和5年（2023）3月31日

松江市文化スポーツ部松江城・史料調査課
